

Ⅷ 高齢広葉樹林（ナラ類、シイ・カシ類）萌芽更新技術の確立

1 目的

里山林の放置による里山広葉樹林の高齢・大径化が進行しており、特にナラ類やシイ・カシ類（以下「ナラ類等」という）は、「ナラ枯れ被害」が増加する要因ともなっている。ナラ類等の広葉樹は、シイタケ原木、パルプ原料、床材、木炭等に利用されるほか、近年では木質バイオマス燃料としての需要も高い。

里山のナラ類等については、萌芽能力が高い 15～30 年生程度で伐採・萌芽更新させていたが、近年の高齢化した広葉樹林伐採跡地では、ヤブ化・ササ山化した山林がみられる状況であり、高齢・大径化に伴う萌芽能力の低下や、不適切な伐採時期が原因と指摘する声があり、高齢広葉樹林の更新方法の確立が急務となっている。

また、高齢広葉樹林からの萌芽更新では、萌芽後の成長（蓄積増加）過程が明らかでなく、適切な管理技術の確立により、低コスト・低労力の森林経営、資源循環利用を図る必要がある。

2 方法

2. 1 実施期間：平成 28 年度～平成 32 年度

2. 2 担当者：西信介

2. 3 場所：鳥取県内

2. 4 調査項目と調査地

2. 4. 1 広葉樹萌芽能力試験：米子市、東伯郡三朝町、西伯郡大山町

2. 4. 2 萌芽枝枯損防止試験：米子市、西伯郡大山町

2. 5 材料と方法

2. 5. 1 広葉樹萌芽実態調査

ナラ類、シイ・カシ類の高齢木の伐採地で、伐採時期、樹齢、伐根の直径、伐採高、萌芽枝の発生位置、本数、樹高等の状況を調査した。

2. 5. 2 萌芽枝枯損防止試験

米子市と西伯郡大山町の高齢コナラ林伐採地で、萌芽枝の枯損防止の施業試験のための試験地を設定した。

3 結果

3. 1 広葉樹萌芽実態調査

13 年、57 年、60 年、80 年生のコナラ林の伐採地で更新状況を調査した。

萌芽率は林齢が高くなるとともに下がったが、80 年生林分でも 50%近い萌芽率があった（図 1）。57 年生林分で萌芽率が低かったが、他の林分が 12 月から翌年 3 月頃の成長休止期に伐採されていたのに対し、8 月中旬頃に伐採が行われた林分で、成長期である夏に伐採が行われたことが、萌芽率が低下した原因と推察された。

60 年生林分と 80 年生林分での萌芽した根株での萌芽本数はそれぞれ平均 6 本と 10 本で、80 年生

告

林分の方が多かった(図2)。これについては、伐根径が大きくなると萌芽の本数が増加するという報告もあるが、今回の調査では伐根径と萌芽本数に関係はみられなかった(図3)。

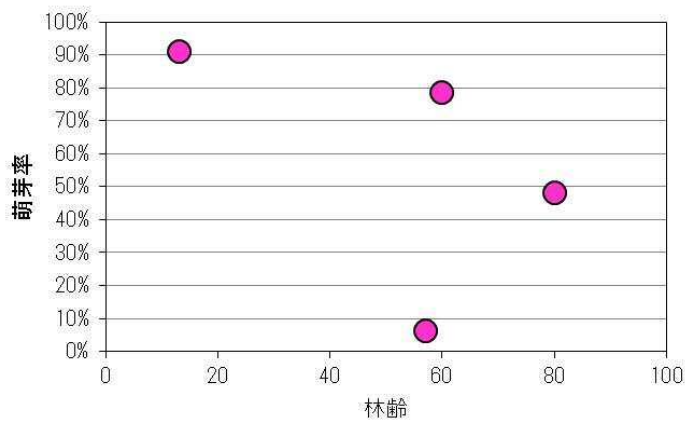


図1 林齢と萌芽率

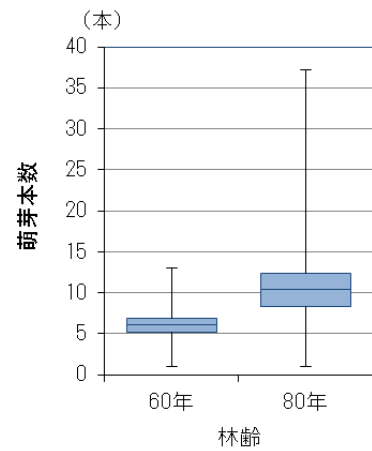


図2 林齢と萌芽本数

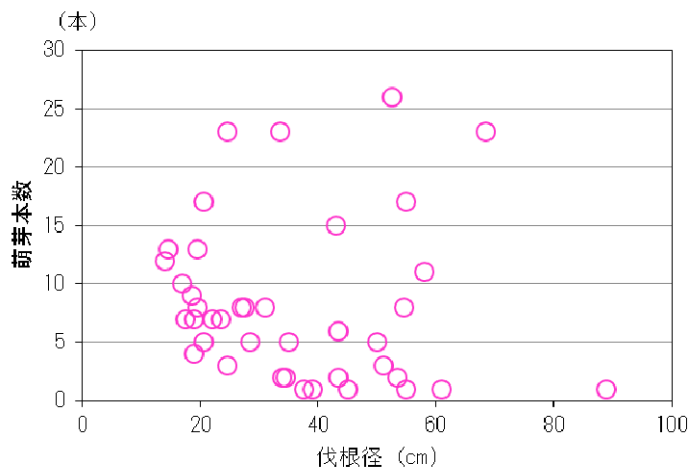


図3 伐根径と萌芽本数

3. 2 萌芽枝枯損防止試験

萌芽枝の枯損防止試験を行うため、表のとおり、米子市本宮地内のコナラ 80 年生林と、西伯郡大山町加茂地内のコナラ 60 年生林の伐採跡地に、固定試験地を設定した。

表 萌芽枝枯損防止試験固定試験地

調査地名	標高	樹種	伐採時 林齢	平均 伐根径	面積
米子市本宮	150m	コナラ	80年	48.9cm	0.29ha
大山町加茂	160m	コナラ	60年	30.1cm	0.50ha